

Title	Relative factors of late cervical lymph node metastasis in patients with stage or oral squamous cell carcinoma
Author(s)	吉田, 佳史
Journal	歯科学報, 117(2): 140-141
URL	http://hdl.handle.net/10130/4235
Right	
Description	

氏名(本籍)	よしだ よしふみ 吉田佳史 (千葉県)
学位の種類	博士(歯学)
学位記番号	第2001号(甲第1242号)
学位授与の日付	平成25年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Relative factors of late cervical lymph node metastasis in patients with stage I or II oral squamous cell carcinoma
掲載雑誌名	Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology 第28巻 2号 156-161頁 2016年3月 http://dx.doi.org/10.1016/j.ajoms.2015.07.005
論文審査委員	(主査) 柴原 孝彦教授 (副査) 井上 孝教授 片倉 朗教授 橋本 貞充准教授 杉原 直樹准教授

論文内容の要旨

1. 研究目的

口腔扁平上皮癌における頸部後発リンパ節転移(以下、後発転移)は、予後に関与する重要な因子である。後発転移や予後関連因子については過去に多数検討され、組織学的悪性度、浸潤様式、脈管侵襲との関連性が報告されている。しかし、いずれの報告もその条件因子が多様で、結果が臨床において有用な指標となっていないのが現状である。そのため、対象症例の条件を限定し、その中で検索の追加が必要と考える。口腔扁平上皮癌の頸部後発リンパ節転移のリスクを予測することが可能となれば、嚴重な経過観察により手術時期を逃すことなく対応でき、治療成績が向上するものとする。今回、stage I, IIの局所切除が行われた口腔扁平上皮癌患者での後発転移に関連する要因について多変量解析を用いた retrospective study を行った。

2. 研究方法

対象は2006年4月から2011年3月までの5年間に東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科を経由し東京歯科大学口腔がんセンターを受診した手術療法を選択した stage I, II 口腔扁平上皮癌の一次症例77例である。Case-control study として、対象症例における後発転移症例を転移群(case)、観察期間中に転移を認めなかった症例は非転移群(control)として比較を行った。検討項目として、臨床的項目は年齢、性別、発現部位、腫瘍長径、臨床発育様式、術式、術前化学療法の有無、術後化学療法および放射線療法の有無、嗜好(喫煙歴、飲酒歴)、既往歴について評価した。病理組織学的項目は、組織型分化度、浸潤様式、切除断端、脈管侵襲、術前化学療法効果判定について評価した。

後発転移に対する関連因子の検討は多重ロジスティック回帰分析を用いた。生存率は転移群、非転移群の各群に対して Kaplan-Meier を用いて累積生存率(Overall Survival Rate)を算出し、Log-rank test による生存率曲線の検定を行った。生存率の算出において追跡観察期間は2012年3月31日とした。有意差水準は $P < 0.05$ とした。

3. 研究成績および結論

頸部後発リンパ節転移を認めた症例は14例(18.2%)であった。各検討項目のロジスティック回帰分析結果より、喫煙歴が頸部後発リンパ節転移に有意な関連性を認めた($P < 0.05$, OR: 11.505, 95%CI: 1.607-

82.341)。また、脈管侵襲も転移群のみに陽性例を認め、その関連性が示唆された。累積生存率は転移群84.6%、非転移群95.1%であった。Log-rank testの結果、両群の生存率に有意差は認めなかった(P=0.1973)。

本検討より、当センターの患者の後発転移は臨床的因子としては喫煙歴が、病理組織学的所見においては脈管侵襲が関与しているという結果が示された。

論文審査の要旨

口腔扁平上皮癌における頸部後発リンパ節転移は、予後に関与する重要な因子である。本論文は、ロジスティック回帰分析により、stage I、IIの局所切除が行われた口腔扁平上皮癌の頸部後発リンパ節転移に関連する要因について検討を行ったものである。そのロジスティック解析の結果、頸部後発リンパ節転移と有意な関連性を認めた検討項目は喫煙歴によるものであった。脈管侵襲は陽性例全てが転移群という結果であった。

本審査委員会では、①組織構造の異なる部位をまとめて解析を行ってもよいのか、②surgical marginの設定はどのように行ったのか、③対象としてstage I・IIをまとめて検討を行ってもよいのか、④95%信頼区間が大きくなってしまうのは何が原因か、という質問があった。それに対して、①本検討を行うにあたり舌症例のみで検討したが症例数の不足により十分な結果が得られなかった、②術中迅速診断では陰性であったが切除検体で断端陽性となった症例であった、③対象を早期癌という分類で行っているため適当な対象症例の選択と考える、④症例数が不足していることが原因と考えられる、と概ね妥当な回答が得られた。

また、本文および図の構成、用語の表現や記載方法などについて修正すべき点が指摘され、訂正が行われた。さらに、がんプロフェッショナル基盤推進プラン「口腔がん研究を臨床に活かせる専門歯科医師養成コース」の修了条件にある内容について書類審査と口頭試問が行われ、その要件を満たしていることが確認された。

以上より、本研究で得られた結果は、今後の歯科医学の進歩、発展に寄与するところ大であり、学位授与に値するものと判定した。